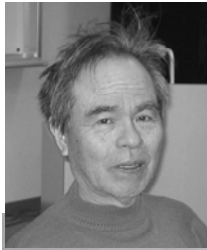


沖縄八重山文化研究会会報

第 229 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
事務局 沖縄県立芸術大学付属
研究所 波照間永吉研究室
那覇市首里金城町三一六
Tel. 〇九八・八八二・五〇四三



第二二九回沖縄・八重山文化研究会（会長三木健）は、二〇一二年一月十五日、県立芸大付属研究所内で開かれ、宮良安彦氏が「石垣島の標準語民話―石垣村の民話の本文とその解説」と題して発表した。

なお研究会に先立ち役員会（三木・波照間・川平・漢那）が開かれた。

会長の三木健氏より、健康上の理由により会長職を辞任したいとの申し出があり、役員会で了承を得た。

また、今後の会の運営について検討し、毎月一回の開催が施設管理上きわめて困難であること等々の理由により、当面、年に四回、三月・六月・九月・十二月、とすることが決まった。

毎月の例会を楽しみにしてきてくださっている会員の皆様には大変申し訳ないことではあるが、ご了承いただきたい。一人でも多くの方々に参加していただくよう、事務局としてもがんばっていく所存であるが、今後とも、みなさまのご協力をお願いしたい。

宮良氏はこれまで、八重山の祭や年中行事、シャーマニズム、方言、神話など、多様なテーマで発表を重ねているが、今回は石垣村の標準語民話について、その本文と解説を発表した。

氏がここで採り上げたのは、初金の頭石の話、赤馬節の由来など一〇話である。今回はそのうち五話までの本文の紹介とその解説を行った。

氏は、八重山の民話の記録を三期に分類している（第七八回の発表による）。一期は王府時代の『球陽』『遺老説伝』など古文獻記録期、二期は標準語記述期として、岩崎卓爾や喜舎場永珣などの民話採録、三期は方言記述期であるという。今回の民話は岩崎や喜舎場の記録した第二期の民話を「標準語民話」として採り上げたもので、解説で他の文献ではどのように記されているのか、あるいは記録者以外のたとえば柳田国男などがこの民話をどのように評価しているのか、などを紹介した。これらの民話の紹介はまだ一部であり、分析と解釈など、今後の作業がまたれる。

石垣島の標準語民話

宮良 安彦

この標準語民話は沖縄大学地域研究所の二〇一〇年九月から二〇一二年一月までの同研究所のホームページに掲載したものである。同研究所のホームページへの掲載は毎月二話柄ずつである。

この民話の本文の話柄名を記すと、つぎのようになる。

1. 初金の頭石の話
2. 赤馬節の由来
3. 弓引き・豊作勝負の話
4. 真乙姥綱引きの由来
5. 番名綱引きの話
6. 七割の由来
7. 富崎の戦争の話
8. 断髪騒動の話
9. 仁王とかたつむりの話
10. 宇根通事の話

本文は宮良安彦篇『標準語石垣村の民話』(一九七一年、白表紙本)に収録されている石垣村の標準語の民話をもとにした。

その本文に、それぞれの本文のあとに宮

良による解説をつけた。

また、それぞれの民話には写真やイラストを付した。
なお、この民話集の表紙、目次、民話出典一覧をこの解説文の付録に収録した。

1. ハツガネ(人名)のチブル(頭)石

■本文

名蔵(なぐら)村は石垣島の名蔵にある。ハツガネは不逞(ふてい)の徒(と)で、神託を軽視したのを、妹のオモトオナリはひとり心を騒がせ、ただ泣きに、泣き入るのは哀しいことであった。

このとき、神は天使を従えて、妹の前に現れて、
「ハツガネにぬかを食わせよ」と命ぜられた。

たちまちぬかがしきりに降り、天空より地上に堆積して、彼の身体を埋没した。

彼はこの奇跡に驚いて、正しくない心と汚い行いを悔い、悪い病にかかり、また頭髪や体毛は色濃かった。

また淡い色のしらみが孵化して、彼の皮膚を刺した。そのために彼は不安な状態になり、ついに衰弱・仮死の人となった。彼は妹を恨んで、とびかかって、打ち殺した。そのとき彼も頓死(とんし)した。

二人のなきがらは石となって、名蔵野に

横たわり、妹のなきがらは諸神が降臨しなさり、おもと嶽(たけ)に運ばれた。

(「旅と伝説」第四巻一号)

■解説

この民話は八重山諸島の民話の第二期(注1)である標準語民話の中の一つである。

この時期は岩崎卓爾および喜舎場永珣などによって民話の記録がなされた。

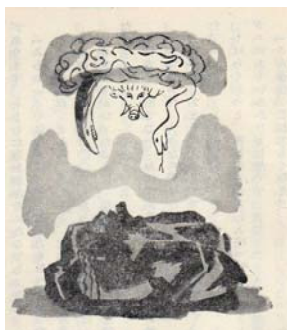
上記の民話は岩崎の「ひるぎの一片」に記述されているものである。

民俗学者・柳田国男は、この民話を世界の神話と神話とを結びつける貴重な存在だとした。

この民話は名蔵村に伝わる名蔵御嶽などの由来としても広く知られている。

なお、上記の本文はもとの文をわかりやすい文体に改めた。

(注1)宮良安彦「八重山諸島石垣島の民話」(二〇〇〇年『宮良当壮記 念論文集』)



文化短信

石垣小学校

一三〇周年の節目 盛大に祝う

石垣小学校（児童三六二人）の一三〇周年記念式典と祝賀会がこのほど同校体育館で行われた。石垣小学校は一八八一年（明治十四）年十二月十五日、登野城の八重山蔵元（元八重山支庁）の一室に「石垣南小学校」として創立。その後、登野城小敷地への移転・現在地への分離新設などの変遷を経て、一九四九年（昭和二四）四月一日学制改革で石垣小学校と改称。これまで一万六四八九人の卒業生を送り出している。式典では歴代校長やPTA会長、字会会長、登校見守り隊などの功労者に感謝状が贈られ、さらなる発展を願った。

真喜良小にロケット片を譲渡

昨年七月、石垣市新川の舟蔵ビーチで発見された「F10ロケット2号機」の破片が、独立行政法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）から真喜良小学校に譲渡された。この破片はJAXAが昨年一月、種子島

の宇宙センターから、国際宇宙ステーションに食糧などを輸送する補給機「コウノトリ2号」を積んで打ち上げた「F10ロケット2号機」の先端部分にあるフェアリングの一部で、アルミ製で厚さ約一〇センチ、幅約一メートル、高さ三メートル余の大きさ。昨年七月に同校PTAの崎山英和さんがビーチに漂着しているのを発見し、JAXAが回収していた。破片は発見場所に近いことから、同校へ譲渡された。

町史「竹富島」発刊

竹富町史編集委員会（登野原武委員長）はこのほど、竹富町史第二巻「竹富島」を発刊した。

町史はこれまで資料編など十五冊を発刊しており、十六冊目となる竹富島編は「島々編」の一冊目。専門部会発足から九年がかりで発刊にこぎつけた。編集委員会では今後、小浜島編や黒島編など各島ごとの町史編集に向けた作業を進める。

竹富島編は集落と自然、歴史と伝承、信仰と祭祀など十二章立て。歴史と伝承では「八重山蔵元の創設と西塘」や「近世初期の人頭税」「琉球処分後の竹富島」、昭和初期から戦中・戦後の時代を各種資料や伝承に基づいて詳細に記述している。

竹富島編はB5判、七〇〇ページ、三一五〇円（税込み）。年度内はタウン・パール山田で販売したあと、四月以降は県内の書店で委託販売する。

南風原英育氏の出版祝う

東京・八重山文化研究会が祝賀会

石垣市登野城出身の元新聞記者、南風原英育氏の著書『マラリア撲滅の挑戦者たち』の出版祝賀会がこのほど、神田で開かれた。東京・八重山文化研究会（宮平隆介会長）の主催。郷友ら約一〇〇人が出席し南風原氏の功績をたたえ、祝福した。宮平会長の主催者あいさつに続き、大谷喜久男東京八重山郷友連合会長ら大勢の知人・友人が祝辞を述べ、南風原氏の人柄や交友の広さなどを紹介した。

南風原氏は、一九四四年沖縄県師範学校卒。四六年、地元紙の「海南時報」の記者を振り出しに、沖縄タイムス記者や東京支社長、取締役専務など歴任。二〇〇一年から九年間、東京・八重山文化研究会会長の務め、八重山の文化の掘り起こしに情熱を注いだ。南山舎から出版した著書は、マラリア根絶に生涯をかけた防疫監吏・黒島直規氏を軸に「マラリア」の撲滅までをまとめたノンフィクション作である。

新刊紹介

防疫監吏・黒島直規氏の半生
南風原英育著

『やいま文庫シリーズ⑬』
マラリア撲滅への挑戦者たち』

八重山におけるマラリア患者数がゼロになり実質的に根絶したと発表されたのは、一九六一年（昭和三六）のことであるといふ。してみると五〇代後半以上の方々は、マラリア採血検査を覚えていた方も多いだろう。本書を読めば、保健所での採血風景のうらに、すさまじいマラリアの実態と、防遏作業に尽くす人間の、壮絶とも言いたくなる情熱、使命感があったことも改めて知ることができる。

本書は、著者も触れているように、一九二四年（大正十三）、二十歳でマラリア予防監吏となり、以来マラリア根絶に一生を捧げた黒島直規氏（一九〇四〜一九八八）の足跡を中心に、八重山のマラリア撲滅に挑戦した人々の軌跡を描いたノンフィクション・ノベルである。もともと小説仕立てで構想されただけあって、時代背景や社会状況の説明が随所に織り込まれ、戦争やマラリアを知らない人々にも、また戦前戦後

の八重山の歴史を知る上でも、読みやすい作りになっている。

本書には黒島だけでなく、医師宮良長、吉野高善、大濱信賢、石垣用中など、マラリア防遏に尽くした歴代の医師ももちろん出てくるが、医師ではなく、一防疫監吏だった黒島を中心に据えたところが、著者の描きたかった「愚直なまでの一途さ」をより鮮明に浮かび上がらせている。黒島を描きながら、著者自身の思いもまたそこにこめられているようである。

著者の南風原英育は一九二四年生まれ。沖縄県師範学校本科卒業後、大浜国民学校訓導となるが、召集され、戦争中は沖縄守備軍部隊に属した。戦後は『海南時報』記者となり、沖縄タイムス社八重山支局長、東京支社長などを歴任した。二〇〇一年〜二〇〇九年には東京・八重山文化研究会の会長もつとめている。

プロローグで著者は、「私がマラリアに関心をもったのは、戦争中多くの人びとがマラリアに罹り、死の淵をさまようようなその姿を目にし、私自身もマラリアに罹った経験があったからである」と書く。戦後の混乱期、荒廃しすぎた社会のなかで、『海南時報』の記者となった著者が、自転車をこぎながら「マラリアとたたかう」をテーマに取材に走り回っている姿は、黒島の姿と時としてだぶって見えるのである。

特に戦争マラリアを描いた第二章の後半は著者の思いがほとばしるような内容で、ここでは、軍命によりマラリア無病地帯から有病地帯へ強制的に避難させられ、マラリア原虫をかかえたまま元の集落にもどつたため、そこでまたマラリアが爆発的に発生するという「戦争」によってもたらされた悲劇―力も名もない人々が政治に翻弄されることでおこる人災を描くことに力が注がれている。これは現代にも通じる問題であり、本書が決して過ぎ去った過去の物語でないことを示してくれる。

なお、「付録・文献にみるマラリア」として、史書に現れるマラリア、民謡にうたわれたマラリアも採り上げている。八重山関係だけでなく、ゲーテやダンテ、日本の小説などまでとりあげたのは、マラリア問題が決して八重山だけのものではなく、昔から世界中であったということを知るきっかけになる。（南山舎、B六判、一九四頁、一八九〇円＋税）

次回のお知らせ

★三月十八日（日）午後五時〜七時

★県立芸大附属研究所2F

★松田良孝（八重山毎日新聞）「八重山―台湾間の人・モノの往来において台湾東部の漁港、南方澳が果たした役割について」